綴った言葉のその先へ

高校2年生の私は、目の前の困っている人を助けたくて、ただ動いた。
でも、「勉強しなきゃいけないのに、こんなことしていていいの？」と迷いもあった。

それでも、もしこの言葉が誰かに届けば、同じように行動する人が増えるかもしれない——そう思ったら、止まれなかった。そして、届いた。私の想いは形になり、「それでいいんだよ」とエッセイコンテストが背中を押してくれた。

大学進学後、留学や研究、学会発表を経験し、企業の方々と社会課題を語り、市長と意見を交わす機会にも巡り合えた。そろばんワークショップを開き、プロバスケットボールのモッパーにも挑戦した。

綴った言葉は終わりではなく、今も私を前へと押し続けている。エッセイコンテストが幕を閉じても、あの時間は生き続ける。

自分の選択を肯定できたのは、行動するきっかけをくれたエッセイコンテストのおかげ。本当にありがとう。

淑乃より

☞ エッセイ「私と世界の接点」（2017）

私に勇気をくれたエッセイコンテストへ

高校に入学後すぐに「海外に行きたい！」と言い出した私。しかし両親は認めてはくれませんでした。
子どもが一人で海外に行くことは不安でしかなかったのでしょう。

それでも諦められなかった私は、宿題であったJICAのエッセイに思いの丈をぶつけたように思います。エッセイ自体は稚拙なものでしたが、この気持ちをもう一度両親にぶつけようというパワーに変わりました。

　翌年、とうとう父が折れてくれ、夏休みをアメリカで過ごすことができました。

そこでの気づきから西洋史を学ぶ学部への進学を決め、ドイツへの留学も経験しました。
今では夢であった世界史の教員として、毎日楽しく授業をしています。

日本はもちろん素晴らしい国ですが、海外にも面白い人やモノや歴史や考え方があることを生徒と一緒に学ぶ日々はとても充実しています。

「自分を信じれば、道は開ける。」勇気をありがとう。

美帆より

尾木直樹先生

お元気でいらっしゃいますか。
その節は私の作品を大賞に選んでいただきありがとうございました。

中学1年の私にとって表彰式は、賞の意味も分からず、テレビで活躍されている「尾木ママ」に会えるという場面でしかなかったように思います。

表彰式の後から、私は改めて尾木先生がどのような方なのかを知りました。そして教育という分野に興味を持ち、現在は大学の教育学部で特別支援教育について学んでいます。

今まで学生として過ごした学校という組織を教員という新たな視点から学習する中で、もどかしさを感じ疑問が様々湧いてくることもあります。そんな時「学校は安心と失敗と成長の砦」という尾木先生のモットーに立ち返ることで解決に近づくような気持ちになります。

改めて、尾木先生が私の作文に目を留めて頂いた事で、私は将来の目標を定めることができました。ありがとうございました。

小山桃子より

☞エッセイ「アフリカに渡った折り紙」(2017)

18歳の私へ

幼いころから「書く」ことが大好きだった私。
物語の執筆や中高で放送部に入ってからは、私の目で見た日々の素敵なできごとをアナウンス原稿にして、自分の声を通して多くの人に届けていましたね。

高校に入ってからも、地方創生やまちづくりに興味を持って、地元の魅力的な場所や人を取材し記事を書いていたことを今でもよく覚えています。

書くことに夢中になっていた私に、当時の国語の先生からの提案でJICAエッセイコンテストを紹介してもらいました。

私は、その時初めて自分の書いた文章が評価され、自分の想いが届いたことに、これまで感じたことのない嬉しさを噛みしめたことを今でもよく思い出します。

そして今、私は当時の夢だった広報の仕事をしています。多くの子どもたちに開発途上国の現状や世界の課題を、私の書く文章を通じて届けていますよ。

これからも自分の思いのままに目で見て感じたことを紡ぎ続けてね。

おさかなより

エッセイ「世界の幸せのために私たちにできること」(2018)

皆さまへ

高校生の頃、私を温かく迎え入れ、人生における大きな転機を与えてくださったブラジルの方々、そしてこの貴重な機会を与えてくださったJICAの方々に深くお礼を申し上げます。

地球の反対側に広がる広大な国と、日系人の存在の大きさに驚かされたこの経験を通じて、ブラジルの先に広がる大きな世界を知ることができたことが、今の私の原動力となっており、 若い時期にこのような経験を積むことの重要性を痛感しています。

今の緊張した国際社会では、国を超えた協力の姿勢がますます求められています。世界銀行でそのような仕事に携わる幸運に恵まれた私ですが、若い皆さんにも、世界をつなぐ志を持ち、一歩踏み出して、自身の転機となるような経験を他国でしてほしいと願っています。そして、これからの時代を担う若者たちに新たな視野を開く機会が今後も広がることを願ってやみません。

世界銀行　開発金融総局担当
副総裁　西尾昭彦より

JICAエッセイコンテスト
主催者様へ

2009年エッセイコンテストで受賞しマレーシアへ研修旅行に行かせていただきました。

私たちは当時、高校1年生で初めての海外渡航でしたが、異国のために自分の特技を生かし汗を流している日本人が沢山いることを知り誇りに感じました。 また、自分とは全く違った環境で育ってきた優秀な学生との出会いに大きな刺激を受けました。

私たちは、コンテストと研修旅行をきっかけに知り合い、その後も互いのよき理解者となり、人生の伴侶として一歩を踏み出すことにしました。

子育てに奮闘しながら、ふと私たちが出会えた奇跡のような瞬間を思い出し、しみじみとした気持ちになることがあります。

生活の中で小さなSDGsしかできていない現在の状況は国際協力とはほど遠いですが、このコンテストが人生を変えたことは間違いありません。 長い間ありがとうございました。

十川和樹、十川(加藤)夏穂より

私の考えを
言葉にできたことへ

高校時代はJICAの研修生の方との交流やJICA横浜での宿泊研修などを通して、国際協力に興味を抱きました。

ただ、膨大な課題がある中で具体的に何に興味があるのか？自分の頭の中を整理できないでいました。

そんな中、私に想いや考えをエッセイという形にする機会がありました。言語化することで自分の目標が定まった気がします。

今、アフリカの地で協力隊として活動しています。
ここでの生活は机上での学びよりも想像以上に楽しくて苦しいです。

私が目の前の厳しい環境にいる人たちにできることはほぼなく、社会を変えるほど私たちの存在は大きくないことに気づかされます。

でも、現地の人は良く歌い、よく笑います。 ここで生活していて現地の人に悩まされるけど、その悩みから救い上げてくれるのも現地の人です。

悩みつつ足掻きつつも刺激のある楽しい日々です。

マラウイにいる私より

高校生だった私へ

当時、地方都市での平凡な日々を物足りなく思い、地元の国際交流イベントに頻繁に参加していましたね。

そんな中で出会った開発途上国からの研修員たち。そして、その時に感じたちょっとした違和感。確たる証拠はないけれど、自分なりに仮説を立ててまとめたのがJICAのエッセイでした。

自分の考え方が正しいのかを知りたくて、東京の大学で学び、留学もしました。自分の世界が大きくなればなるほど、この世界の広がりや深さ、複雑さに圧倒されましたね。同時に、物事には様々な側面があり答えが一つではないこと、だからこそ人々が協力し合い、解決を目指すことに価値があることも知りました。「自分も世界を変える力になりたい」と。

そして今、私はJICA職員として世界の課題と向き合っています。自分の思いを形にしてくれた高校生の私と、その機会をくれたJICAエッセイコンテストに、心から感謝したいと思います。

JICA職員より

エッセイコンテスト2017
受賞者をはじめ、
ラオスの旅を共にした皆へ

あれから8年が経ちます。今も互いを思いやり合う関係であること、一緒に旅をした愛すべき時間を思い返すことが、私の人生を何度でも暖かくしてくれます。

学生だった私も今では社会人になり、忙しい日々の中でも、皆のことを思い出して気持ちがふっと柔らかくなることがあります。

ラオスで私は、ありのままを受け入れ、大好きな人達と共に生きることこそが、守りたい幸せだと感じました。

自分の、周りの、世界の幸せとは何か考える機会を得られただけでも素晴らしい経験であったのに、今もずっと特別な経験をさせてくれるエッセイコンテストに、そして皆に心から感謝しています。

エッセイを書き綴ろうと思い立ってくれて、授賞式のあの日に出会ってくれて、ラオスでゆっくり進む時間を一緒に過ごしてくれて、今でも大切な友人であってくれて、本当にありがとう。

ライカより

☞ エッセイ「輝く未来の礎を築く」（2017）

高校1年生の冬の自分へ

当時の自分は人生で一番のどん底に落ちたぐらい自分の弱さを受け止めるのに苦労した日々を送っていた。そして、自分の原点である海外の生活とその現状を言語化したいという想いがあった。

それでも言語化することで多くの人に伝わるように誰かのきっかけになりたいと思いながら海外の経験とその後の国際情勢について考えていた。

この経験は、「決して無駄ではなかった。」と断言でき今の生きる原動力だ。

最近は、インドネシアでの研修を通しその国が大切にしていることが何かを考えさせられる場面に巡り合えた。

エッセイを書いていた自分は「質の良い教育をみんなに」という教育の平等性を考えた。今は教育は国のアイデンティティーだけでなく宗教や家族といった限られた範囲も重要視している。

このように、考えられたのもエッセイを書き自分の言葉がより洗練されたものになったからと実感している。ありがとう。

20歳の市橋治騎より

☞ エッセイ「六年前あの一言で」(2022)

松田先生へ

私は今JICAのパラグアイ事務所にいます。

高校の夏休みの宿題、JICAエッセーコンテスト、障害者など誰も取り残さない世界を目指して将来働きたいという夢を与えてくれたこと、大変感謝しています。

エッセーではタイのスラム街に生まれ、シャンティ国際ボランティア会の支援で学んでいたオラタイさんとの出会いで受けた衝撃について書きました。

ご両親の焼き鳥屋さんを手伝いながら図書館で勉強し、誰もが教育を受けられる世界を目指していた彼女の話は誰もが教育を受ける機会の大切さを教えてくれました。

そして、今年オラタイさんと２４年ぶりにオンラインですが、再開しました。

変わらず頑張る彼女と対話し また誰も取り残さない国際協力をJICAの仲間と実現したいとの思いを新たにしました。

多くの仲間たちと引き続き頑張りますので見守っていてください！ 心から感謝を込めて。

福地より

☞ **エッセイ「オラタイさんと僕の夢」（2001）**

川崎市立橘高等学校国際科の先生方へ

Maswera sei!
(Shona語でこんにちは！)

ご無沙汰しております。
高校卒業から早7年、私は目標を叶え、現在JICA海外協力隊2024年1次隊として、ジンバブエで活動しております。

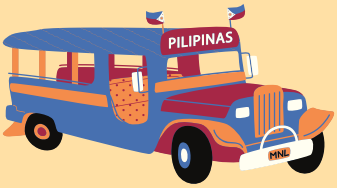
JICAエッセイコンテストは、毎年の高校の夏休みの課題でした。当時、私は全力で競泳に打ち込みながら、毎夏のエッセイ執筆を通じて、特にサブサハラアフリカ地域が抱える課題について考察したことをよく覚えております。

そして、エッセイコンテストを通じてサブサハラアフリカにおける子供の教育機会とジェンダー問題について興味を持ち、現在に繋がっております。

今の私があるのは、間違いなく、高校時代の私にJICAエッセイコンテストを通じて考えるきっかけを与えて下さった橘高校国際科の先生方のおかげです。

先生方、Maita basa!
(Shona語でありがとうございます！)

Midoriより



フィリピンの高校生の
みなさんへ

こんにちは！みなさんは今、どんな夢に向かってどんな勉強をしていますか？

私は医学部に入り、医師になるために毎日たくさんの新しいことを楽しみながら学んでいます。

あの頃に見た、夢に向かって感謝しながら勉強しているみなさんの目の輝きは、いつも勉強の支えになっています。

ボランティア活動を通して学んだ、相手の立場に立って尊重すること。これは、医師になってからも患者さんと接していく上でとても大切なことです。

このことを常に頭の片隅に置いて、多くの患者さんの力になれる医師になります！これからも、辛いことや乗り越えなければならないことも数多くあると思います。

そんなときは、みなさんの目の輝きを思い出して、頑張りますね！大切なことを教えてくれてありがとうございました！

りさこより

エッセイ「輝く世界のために」（2020）

羽ばたいていく娘へ

小学生のときに教科書で目にした「泥水を飲む発展途上国の子どもたちの写真」。

それがあなたの人生にこれほどの影響を及ぼすとは思っていませんでした。この写真を見てあなたは国際貢献を志し、それから10年が経ちました。

エッセイコンテストに書き記した「発展途上国という言葉を無くしたい」という夢は、あなたがその夢を実現するための決意表明であり、またロードマップでもありました。

その後コロナ禍で前に進むことができない時期が続きましたが、今も途上国へ出向き、海外ボランティアに参加しながら子供たちが直面する問題を拾い続け、その解決策を探求し続けている姿に親として嬉しくそして頼もしく感じております。

あなたと一緒に夢を語る時間は、母にとっても貴重な時間でした。大学生になり自分の羽で世界に飛び立とうとする娘をこれからも応援しております。

母より

☞ エッセイ「力になりたい」（2018）

応募前の私へ

「実際に見たことを文章で広く伝える仕事に就く」。エッセイコンテストの応募後に立てた目標です。先日希望がかない、来年の4月から記者として働きます。

コロナ禍の夏休み、国際協力NGOのオンラインセミナーに参加したことが出発点でした。画面越しに見た砂煙の立つ難民キャンプ、うつむいた子どもの顔。衝撃を自分の中だけに留めてはいけないと思い、締切日の午前3時まで熟考して文章を練りました。

大学では子ども食堂でのボランティアや学生スポーツ新聞の記者を経験します。立場の弱い人に思いを馳せることと、文字で誰かに伝えること。エッセイをきっかけに定まった軸が今の自分につながりました。このコンテストを見つけた当時の自分に感謝します。
そして未来の私へ。利益に溺れず、どこかで困っている人の存在を忘れない記者でいてください。機会と人を大切に、これからも自分の言葉を紡いでください。

今の私より

エッセイ「現実」と向き合う」（2020）

JICAエッセイコンテスト
関係者の皆様、尾木先生へ

私はJICAエッセイコンテストから2つの宝物を頂きました。

1つ目は「出会い」です。マレーシア研修旅行での「受賞者の皆様との出会い」、「マレーシアの方々との出会い」、そして「未知の体験との出会い」です。

2つ目は（オンラインでしたが）、授賞式で尾木先生から頂いたお言葉です。先生の魔法のような優しい言葉は私に自信を与え、これからもっと頑張ろうと勇気をくれました。

私は研修旅行が終わった後も、他のボランティアに参加しました。そして今年度、他のコンテストでニューヨークの国連本部を訪問する機会もいただくことが出来ました。
私にとってすべて始まりはこのJICAエッセイコンテストです。

コンテストを開催してくださった関係者の皆様、尾木先生、そして同じく参加された皆様に心より感謝申し上げます。

この貴重な経験を通じて得た学び・出会いを、これからの人生に生かしていきたいと思います。

野中　真里より

☞ エッセイ「ダブルの私にできること」（2021）

おじいちゃんへ

お元気ですか？私はフィジーで充実した高校生活を送っています。

おじいちゃんと訪れたネパールでの経験は、私の価値観を大きく揺さぶり、今でも鮮明に記憶に残っています。

特に、JICAの方から学んだ「未来につながる支援」という言葉は、私の中に深く刻まれ、その後に大きな影響を与えました。

今、私は環境保全活動のリーダーをしています。誰かの役に立てることが嬉しく、活動を通して学べることがたくさんあります。

そして「未来につながる支援」を、今度は私が実践していくんだという思いで、新たに離島に桟橋をかけたり、マングローブの植樹をはじめました。

おじいちゃん、ネパールに連れて行ってくれて、今も私の挑戦を支えてくれてありがとう。

おじいちゃんのおかげで、私は世界を広く捉え、学び続けることができるようになりました。これからも感謝の気持ちを忘れず、成長していきたいと思います。

愛海より

☞ エッセイ「今、私にできること」（2020）

協力隊の大先輩方へ

中3の夏休みの宿題で出したエッセイコンテスト。外国籍の友人との思い出を書いた作文は入賞し、そのお祝いイベントで先輩隊員と出会いました。

現地の服装で、隊員時代の話を幸せそうに語る先輩方の姿を見て、私も絶対に協力隊員になると心に決めた、今でも大切な思い出です。

先日、その時の作文を読み返しました。そこには、「将来友達になるかもしれない、途上国に住む彼ら」のことを思う幼い言葉が残っていました。

あれから10年以上経つ今、異国の地で、私は素敵な友達に囲まれています。そしてその中には、過去に出会った隊員の名前を今でも覚えていて、懐かしそうに思い出を聞かせてくれる人もいます。

先輩方が築いてくださった素敵な関係は今も受け継がれています。あの時の憧れが、今ここで現実になっていることに感謝しながら、私もここでしっかりと生き、次へバトンを渡していきます。本当にありがとうございます！

YAAより

エッセイ「世界の子どもたち」（2012）